

立教学院創立一三〇周年の節目の時に

松平信久

立教学院は、本二〇〇四年度に、創立一三〇周年を迎えました。この節目の年にあたって、学院では、学院内各学校の協力のもとに、各種の記念行事を行ってきました。記念感謝礼拝・祝賀会、立教学院史展、江戸川乱歩展およびシンポジウム、環境ボランティアキャンプ、芸術関係プログラム、チョモランマを仰ぎ見ての記念礼拝、立教の将来像に関するシンポジウム、学術関係プログラムなどです。一つのテーマに絞って諸行事を組織するというほどの統一性や系統性はありませんでしたが、一三〇年におよぶ道筋を振り返りながら、今日立教学院・諸学校があることを喜び、そのことを感謝し、そしてこれからの本学院の在り方を模索するということが、今回の周年行事を行うに際しての目標であり願いました。各行事は、学院内の各学校や関係機関の提案、企画、運営にもとづいて実行され、その目標達成に向けて成果をあげました。

そのうち、立教のこれまでの歩みの点検という課題からみれば、立教学院史資料センターの企画、運営にもとづく「立教と戦争」展が大きな意義をもったと考えます。この展示は、いわゆる訓令一二号や、太平洋戦争などの、キリスト教学校存亡の根幹にかかわる状況のもとで、本学院がそれらにどう対応したかを、客観的な資料に基づいて展示したものでした。その展示によれば、これらの事態に対する立教の対応は、苦渋の選択によるものでしたが、特に後者の場合は、「キリスト教に基づく教育」という大前提を（具体的な指示や外圧による以前に）自から却下するというものであつ

たことが、示されたのでした。勿論、資料としては残されない、あるいは形には現れない強圧が、当時の学校当局者に重くのしかかっていたという可能性は大きかったとしても、当時の、寄附行為改定のあり方は、これを見る者に、強い衝撃を与えずにおかないものでした。この展示にあたっての解説の記事を見ますと「一九四二（昭和一七）年九月、邦人のみによって構成された理事会是、寄附行為に規定する立教学院設立の目的を『基督教主義による教育』から『皇国の道による教育』に改めることを決議、続く十月にはチャペルを閉鎖する。ここに至って立教は『建学の精神』を捨てたのであった……。」とあります。立教の歩みは、このひと事からも、挫折と混迷を経たものであったと言わざるを得ません。学院史を振り返る作業は、このように自らの歩みの中の刺や針を見つめ直す辛い作業をも含むものであることを改めて思い知らされました。そして、「建学の精神を捨てたのは、あの時ばかりだつたらうか」、とも考えるのです。

立教学院が立教学院らしい在り方を模索するためには、創設者が掲げた建学の理念を再確認し、そこにたち戻ることが必要であり有効なことでしょう。ただし、立教のように、学校創立にあつたての明文化された設立目的や教育目標が示されたわけではない場合、その「建学の理念」はなんであつたのかの確認は、必ずしも容易なことではありません。これまでに記されてきたいくつかのウイリアムズ主教伝でも、立教建学の意図は、「西洋文化をその根拠から伝えること」にあつたとする見方がある一方、主教の教育事業構想の目的は常に伝道機関の一つとしてのそれであつたとする主張もされています。また、立教創設の頃にウイリアムズ主教によって強く意識され学校設立の狙いのひとつであつたとされる、進化論などへの対抗という課題も、創立者の意思の尊重という立場から直ちにそこにたち戻ることが適切であると考えるにいくことは明らかです。

歴史研究によって、創立者の建学の願いを明確にしなおすとともに、それを現代の社会・教育・文化状況のなかで再吟味し、再構築することが、どちらも欠かせない重要課題であると、私は考えます。そしてそのことは、学院史資料センターのような専門的研究機関に期待する側面が強いと同時に、本学院の教育・研究・運営にかかわるすべての者が担うべき課題でもあると考えられるのです。

（立教学院院長）